

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第15回

4大陸・6勤務国・36カ国への国際教育支援を通して得た学び

UNICEF Education Specialist 岡本 啓史

Supported by  日本財団 THE NIPPON
FOUNDATION

2020年12月

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第15回

4大陸・6勤務国・36カ国への国際教育支援を通して得た学び

UNICEF Education Specialist 岡本 啓史

講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」の 講演会記録の刊行に寄せて

白山 利信

筑波大学人文社会系教授・NipCA プロジェクト実務責任者
グローバルコミュニケーション教育センター長

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」は、2019 年 1 月、文部科学省「大学の世界展開力強化事業（ロシア）」の本学の採択事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」（2014-2019）の成果とノウハウを引き継ぎ、新たなミッションを担ってスタートしました。初年度を成功裏に締めくくべく残された事業案件を進めていた 2020 年春、新型コロナウイルスのパンデミックという事態に突然見舞われ、2月下旬の時点で初年度予定していた研修事業や国際学会は中止せざるを得ず、次年度の計画のすべてが変更を余儀なくされました。

新型コロナウイルスが収束しない中で始まった当プロジェクトの 2 年目ですが、活動形態をオンラインに切り替え、派遣・受入事業を除けば、前年度以上のプロジェクト活動を推進することができました。NipCA プロジェクト主催の公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズもそうした事業のひとつで、Zoom によるオンライン開催に切り替えて行いました。初年度は計 10 回開催しました。今年度は、初年度を上回る聴講者（毎回平均して 50 名）に参加していただきました。聴講者から講演内容が素晴らしいので、冊子として読みたいとの多くの声を頂戴しました。そこで、本プロジェクトの社会貢献の一環として、講演会記録冊子として刊行することにしました。

本冊子に収められているのは、今年度の第 5 回目、通算では第 15 回目になる「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会「4 大陸・6 勤務国、36 カ国への国際教育支援を通して得た学び」の全体を収録したものです。今回講師を務めていただいた、UNICEF North Pacific Education Specialist の岡本啓史先生に深く感謝申し上げます。岡本先生のご講演は、はじめに聴講者にアンケートを取ってリアルタイムに関心の高い話題を選んで変えていき、インタラクティブに話を進めていくという画期的な方法をとっていました。気温 45 度のモーリタニアの砂漠での難民支援の話をしたかと思うと、今度はマイナス 45 度のモンゴルでの遊牧民の子どもたちの支援の話に移ります。ご自身のキャリア形成の話では、役者を夢見てニューヨークに渡り、一転してレストランでミシュラン星の一流料理人を目指します。しかし、教育の機会に恵まれなかったという 20 歳年上の、メキシコ出身のキッチン係の苦労人の話に衝撃を受け、貧困層の教育開発に人生をかけると一大発起し、これまでのキャリアをすべて捨ててしまいます。その後、大学院に入学し、途上国の教育開発を学び、修士号を取得すると、念願の国連職員になります。一見破天荒な生き方に見える岡本先生を貫いているものは、「どこまでも学び続ける人間でありたい」という強い思いではなかったかと感じました。岡本先生の熱のこもったお話にどんどん引き込まれていきました。

興味深いお話から見てきたのは、岡本先生の、相手のことをまず想い、尊重する姿勢です。難民支援といっても、難民キャンプには手厚い支援が来るものの、その周辺のホストコミュニティには支援が来ないという現実に気づき、ホストコミュニティへの細やかな配慮を含む取り組みの大切さも指摘されました。伝え手と受け手の良い関係をいかに構築するか、まさにこの点が国際支援の急所だということを教えてくださった気がします。岡本先生の健全な双方向の関係を重視する姿勢は、質疑応答で相手の立場に寄り添う様子からも窺うことができ、本冊子を通して読者の皆さんにも感じ取っていただけるはずです。

今年度の講演会はすべて冊子化を予定しております。今後も NipCA プロジェクトの講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」にどうぞご期待ください。

最後になりますが、日頃から筑波大学 NipCA プロジェクトを陰に陽に温かく支えて下さっている公益財団法人日本財団の森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、ハフマン・ジェイムズ国際事業部課長、そして日本・中央アジア友好協会 (JACAFA) のヴルボスキ京子会長に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

1. 本講演の背景

山本 本日は、筑波大学第15回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会にご参加いただきありがとうございます。開始まであと5分ほどございます。それまで、表示されているアンケートにお答えいただけますようお願い申し上げます。開始までもう少々お待ちくださいませ。

それではお時間になりましたので、始めさせていただきます。みなさま、大変長らくお待たせいたしました。只今より、筑波大学「第15回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会を開催いたします。本日はお忙しいなか、たくさんの皆様にご参加いただき、誠にありがとうございます。わたくしは、本日司会進行を務めさせていただきます、筑波大学人文社会系 准教授の山本祐規子と申します。また日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクトの担当教員も務めております。どうぞ宜しくお願い致します。

ご参加の皆様へのおねがいになりますが、聴講中はマイクとカメラを消していただけますようご協力お願い致します。公演終了後、質疑応答の時間を設けますので、質問・コメントがある方のご発言は講演が終わるまでお待ちください。またチャットボックスの方では随時質問、コメントをお受けいたします。講演中に参加者の皆様にご意見を伺い、その回答が反映される機会も一部ありますので、そちらもどうぞ参加しながらお楽しみください。なお、この講演の様子は後日オンデマンドで配信されるため、録音、録画されておりますことを、あらかじめご了承くださいようお願い申し上げます。

それでは、まずはじめに、本プロジェクトの実務責任者であります、本学教授の白山利信から、ごあいさつと本講演会の趣旨について簡単にお話しさせていただきますと思います。白山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

白山 よろしく申し上げます。人文社会系教授でグローバルコミュニケーション教育センター長をしております、白山利信です。また、筑波大学「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」の実務責任者しております。

本日の講演会は、筑波大学のこの「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」の主催となっております。さらに、本学のグローバルコモンズ機構、それからSGU事業推進室、グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会、地域研究イノベーション学位プログラム、人文・文化学群、社会・国際学群が協力組織となっております。

筑波大学「日本財団中央アジア・日本人材育成プロジェクト」では、中央アジアと日本を自在に行き来し、当該社会の発展のために活躍できる人材育成に日々取り組んでおりま

す。将来のキャリアパスに役立つテーマを選んで、中央アジア出身の留学生たち、および本学の日本人学生が、日本の国内事情、中央アジア社会の諸問題、世界のSDGs、持続可能な開発目標達成に寄与する取り組み等をより深く理解するための機会として、「中央ユーラシアと日本の未来」と題する公開講演会をシリーズとして実施しております。

第15回目の公開講演会となる今回は、国際教育学のご専門を生かして、在外日本大使館、国際NGO、UNESCO、UNICEFといった国際機関で長く仕事をされ、現在、UNICEF North PacificでEducation Specialistとして活躍されている岡本啓史先生をお招きいたしました。大変お忙しい先生ですけれども、時間をこじ開けて来てくださいました。本当に心から、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございます。本日は、多彩で、多様で、なおかつ豊富な、国際畑の現場で得られた知見の数々をしっかり学んでいきたいと思っております。それでは、司会の山本准教授にバトンタッチしたいと思います。よろしく願います。

2. 講師紹介

山本 ありがとうございます。それでは早速、本日第15回目になります「中央ユーラシアと日本の未来」、ご講演いただくUNICEF Education Specialistであります岡本啓史先生をご紹介させていただきたいと思います。

岡本啓史先生は、神戸大学発達科学部で学士を取得後、アメリカ・ニューヨークに渡りまして、ニューヨーク大学大学院国際教育学で修士号を修められました。14年の海外在住経験をお持ちで、これまで教師、教員トレーナー、日本大使館、国際NGO、また、国連の機関でありますUNESCOやUNICEFの勤務を通して、4大陸、6勤務国において、36カ国の教育支援をされてきたという経歴をお持ちです。現在、UNICEFのNorth Pacific事務所唯一のEducation Specialistとして、3カ国の教育プログラムを担当していらっしゃるということです。

岡本先生は非常に多才でいらっしゃるようで、さまざまな地域でのお仕事を通じて身に付けられた現地語はもちろんですが、そのほかにもスペイン語、フランス語など、5カ国語以上の言語を操り、また、5種類の教員免許、それからプロジェクトマネジメントの国際資格やライフコーチの資格なども持っていていらっしゃいます。これまで担当された国際支援事業は、開発と緊急人道支援の両分野で国やグローバル政策に関わるようなハイレベルなものから、教員養成や保護者、子どもたちを対象とした教育現場で直接支援、さらに研究プロジェクト等、多岐にわたった分野でご活躍されてきま

した。

本日、岡本先生には、世界のさまざまな場所、団体組織で国際支援を通して得られた学びに関するお話をしていただきます。加えて、国際支援の道に入るまでのユニークな経緯や、国際支援以外でもさまざまな顔を持つ岡本先生の別の一面についてもお話しいただけるということです、どうぞお楽しみください。

なお、この講演の内容や講師の先生のご発言は個人の見解であり、現在・過去を含めて所属組織を代表するものではないということです、その点、あらかじめご了承くださいますようお願い申し上げます。それでは、岡本先生、どうぞよろしくお願いいたします。

3. 講演

(1). 事前アンケートによる参加者のニーズ確認

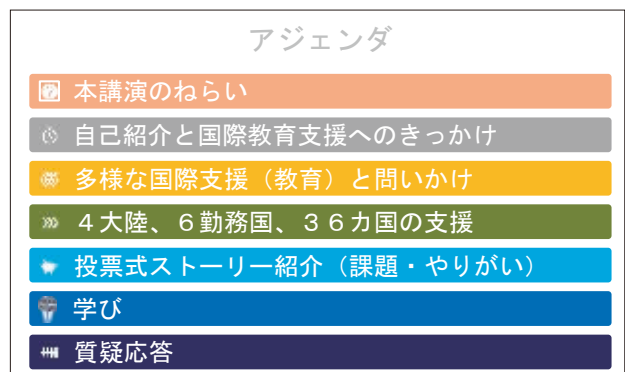
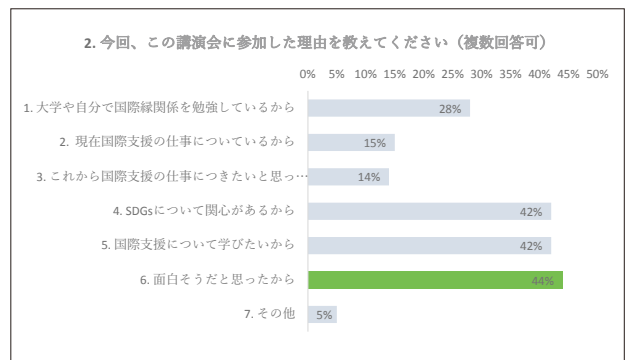
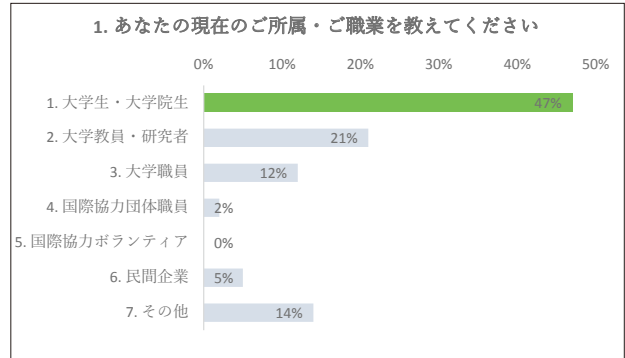
岡本 白山先生、山本先生、そして参加者の皆様、こんにちは。ご紹介に預かりました岡本です。プロジェクト関係者や教職員の皆さま、今日はこのような機会を与えていただき、本当にありがとうございます。それでは、早速ですが、私の講演を始めさせていただきます。

と言いたいところですが、その前に、先ほど皆さんに取っていただいた事前アンケートにて、ご所属やご職業、そして今回の講演会に参加した理由を伺いました。その結果を共有させていただきますが、このような結果になりました（右図）。

今日、一番参加者の中で多いのは、大学生、大学院生で、その次に教員、研究者、大学職員、その他。その他というのがどういう方か気になるころですね。そして、今回の講演会に参加した理由というのは、「面白そうだったから」というのが一番に挙がっていて、すごくありがたいことです。そのご期待に応えられるように頑張っていきたいと思っておりますので、皆様、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

(2). 講演のアジェンダとねらい

それでは、本日の講演のアジェンダ（内容）はこのようなとなっております（右図）。はじめに本講演のねらい、そして自己紹介と国際教育支援へのきっかけ。多様な国際支援を、主に教育を専門にしましたが、その中でいろいろ問い掛けてきたこと。次に、本講演のタイトルでもある4大陸、6勤務国、36カ国の支援。その後は投票式のストーリー紹介ですが、ここで皆さまのご参加を大いに期待しておりますので、よろしくお願いいたします。後で詳しく説明しますが、いくつか選択肢を提示し、その中から一つ選んでいただくという投票式を考えています。その後、これまでの経験を経て得



れた学びを紹介し、質疑応答にうつりたいと思います。本公演は金曜日の夕方に実施することもあり、ごつぱらんに、そして落ち着いてお聞きいただき、そして参加するところをご参加いただければ幸いです。

本講演のねらいは、端的にいうと、学びから学びです。講師の国際支援や海外勤務や生活の経験を通して得た学びやストーリーを紹介することで、参加者の学びや国際支援における知識の向上に貢献することを狙いとして、進めさせていただきます。

(3). 自己紹介とこれまでの経緯

自己紹介と国際支援ということで、自分が何者なのか、そして国際支援に至るまでどんな道を経てきたのかということを一枚のスライドにまとめてみました（次頁下図）。

まず、私は教育者ということで、基本的には、履歴書にはスライド左上の灰色で表示されている内容を主に記載しま

すが、実は、それは私という人間の一部でしかありません。教育一つをとってみても、教育者でありながらも学校教育への疑問というのは昔から今に至るまで抱いています。一方で、今もオンラインで言語を教えていたり、ライフスキルを教えていたりするという立場にもあります。ほかにどんな顔を持つかというと、「生涯学習者」と「パフォーマー」で、この2点についてもご紹介させていただきたいと思います。

まずは生涯学習者。「生涯」というところにアンダーラインをしています、個人的には学び続けるのがすごく好きで、それは教育に従事する中ではすごく大切なことだと思っています。例えば言語。先ほどご紹介にも挙げた通り、現地語はサバイバルレベルまで学んで現地の人の考えや文化を少しでも学ぶようにしています。加えて、母語や独学で学んだ言語も入れると5言語以上を操るくらいまでになりました。まだまだこれから精進していきたいと思っていますが、他には学びをテーマにしたブログを5言語で執筆。そして、一人旅も好きでこれまで60+カ国に行ってきました。「+」というのは、途中から数えるのをやめたからです。かわいい子には旅をさせろとは本当によく言ったもので、旅から学ぶことは本当にいろいろあります。そして、ライフコーチ・オーガナイザー、絵本の作成、そして本を執筆中と、基本的には9時から5時の仕事以外の自分のプロジェクトや学びにも注力しながら生きています。

もう一つのパフォーマーなんですけれども、音楽家、ダンサーとして活動してきたのに加えて、役者や料理人。ミシュランの星があるレストランで料理人として勤めていたこともありました。そしてデザイナー、クリエイターというように、総じて創って表現するのが好きということです。

大まかに言うと、その三つを含めて今の自分という人間が出来上がっているのかなと思います。それでは、国際支援までの10章について簡単にご説明させていただきたいと思

います。

最初の「学び」に関してですが、私は、子どものころから好奇心の塊でした。しかし、私の行っていた小学校、中学校、高校では、従来の教育といえますか、質問を多くすると煙たがれるような風潮があり、質問しすぎて怒られることもよくありました。このように好奇心を抑えて型にはめ込めるタイプの教育はどんどん時代遅れになってきて、世界で著名な教育研究者も、学校は好奇心を殺してしまっているという説を唱えています。一方で、幸いにも学校以外ではいろんなライフスキルを学んできました。学校で学べず、外では学ぶ。そのような矛盾を意識し始めたのは、高校生の時に進路を考えていた頃です。大学に進学しようか考えているときに、学部選びの前に将来どういう仕事に就こうかと考え込んでいました。日本や他の先進国は大体、小・中・高校ぐらいまでは問題なく行っている人が多いかと思いますが、その時期は脳と体の発達において非常に大事な時期であるにも関わらず、長い時間を過ごしながらも、私のようにあまり学校に良い思い出がない人がこれからも出てくるのは残念だなと思いました。そこで、「自分が持てなかった良い教育を提供したい」と思い、大学では教育を専攻しました。

そこで、私はやりたいことは全部やりたいというタイプなので、大学では4年で5つの教員免許を取ろうと思い、一回生から授業をびっしりと取っていました。と同時に、サークルで始めたストリートダンスにとことん夢中になり、ダンス大会でも優勝・入賞を繰り返すなど、パフォーマーとしての活動を続けました。大学を卒業してからも、昼は教育者として教鞭を執り、夜はダンサーとして活動をする生活が続きしました。教壇とダンスステージという2つの舞台を経て、意外にもすごく両者は似ているなと思いました。昼は子どもを盛り上げる。夜はオーディエンスを盛り上げる。両方面を経験して得た自分の中での気づき。そこで、いい教師はいい役者なんじゃないかな、そしてその逆も然りかなと自分の中で得た気づきをもとに、「いい教師になるために役者修行をしよう!」と思い、舞台役者の勉強をしにニューヨークに行きました。

その後は役者として舞台に立ちながら、色々とやりがいはいりましたが、言語の壁にぶつかって、まだ何も達成していないという気持ちがあったため、まだ日本に帰りたくないなと思い、生活の基盤を整えるために料理人の仕事を始めました。偶然の出会いでした。

そこで、料理人時代は四つの店で働きましたが、本当に色々なことを学びました。まずは、創るのがすごく好きだという発見。そして、料理には忍耐が必要だということ。一品一品を作るのにも時間がかかるというのがありますが、料理

自己紹介と国際支援

教育者

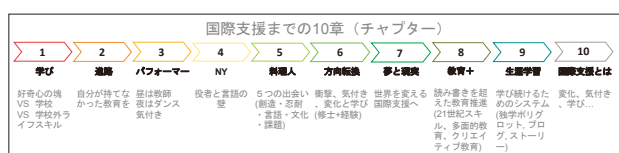
- ・学校教育への疑問
- ・5つの教員免許
- ・教師・教員トレーナー
- ・国際教育支援（学校・NGO・大使館・国連）
- ・教育分野の学位
- ・オンライン言語教師
- ・ライフスキル講師

生涯学習者

- ・独学ポリグロット(5+言語)
- ・ブロガー（テーマは学び）
- ・旅人（60+カ国）
- ・ライフコーチ・オーガナイザー
- ・絵本作成・本執筆中
- ・9-17時以外のプロジェクト/学び

パフォーマー

- ・音楽家
- ・ダンサー
- ・役者
- ・料理人（ミシュラン星）
- ・デザイナー
- ・クリエイター



人として成長するためにも、すごく我慢して、少しずつ、訓練をして、チャンスを頂けるようにアピールして、やっと掴んだチャンスでも最初はうまくいかない、そういうサイクルを繰り返して上手になる。どのプロセスでも学びだらけでした。そして、キッチンで新しい言語と文化を学んだということがこの話の目玉になります。ニューヨークの、というよりアメリカ合衆国の主要都市のレストランというのは、大体、お客さんとして店に入ったときにはすごくホールが華やかな店が多くありますが、裏側のキッチンに入ると様子が違う。ほとんどのセクションは火を取り扱っているのも熱との戦いで、しっかりしている店ほど、違うセクションとの料理をタイミングよく出すことが当たり前なのでスピード勝負で罵声も飛び交う。そんなキッチンの従業員は、大体トップシェフやごく一部を除けば、ほとんどが滞在ビザを持たない中南米の方、特にメキシコとかの方が多い。彼らはとても真面目に働き、給料も最低賃金より遥かに低い、ある意味アメリカの経済はそういうところで支えられているという皮肉な一面があります。実はその人たちを通じて、好奇心から彼らの言語であるスペイン語を独学で学び、色々な話を通して文化的なものや、国境超えの際の色々なストーリーも聞きました。とにかく話をしたいという思いが強かったため、ひたすら本やビデオでスペイン語のインプットをしてキッチンでアウトプットして試行錯誤を繰り返す毎日。アメリカのキッチンでスペイン語を本格的に覚えた日本人というのはなかなか珍しいケースなんですけれども、それを通して彼らの文化や抱えている課題等を休み時間とかに聞いて学び、仕事に戻れば戦場を共にした仲間と過ごす毎日でした。彼らと過ごした何気ないようで、自分の中では濃い時間というのを通して、ある日、方向転換になった瞬間があるんですね。

私は料理がすごく好きで、今後も料理人でやっていこうかなとか思っていたほどでした。しかし、ある昼休みに、すごく仲の良かった、20歳ぐらい年上の方がいたんですけど、その人は奥さんと娘さん2人をメキシコに残して、当時で既に15年以上会っていなかった。そういうつらい境遇にある中でも、どんなに罵声を浴びても、仕事で大変な思いをしてもいつも笑顔を絶やさずに、誰からも好かれる、私が心から尊敬していた人です。その人と、いつものように昼休みに何げない話をしていた頃に、私がふと「一つ何か願い事を叶えられたら何をしたい？」と聞いたら、メキシコに帰りたい、もしくは家や車が欲しい等を言うのかなと思ったら、少し考えたあとに帰ってきた返事。

「学校に戻りたい。」

「どうのこと？」と私が聞いたら、「僕は小学校3年生で、父親から働けと言われて中退させられた。僕みたいな人は

いっぱいいるし、特に疑問視しなかった。今は娘が2人いて、妻とも15年以上会っていない。もし僕が教育を受けていたら、今、こんなところでこういうことをしていないかもしれない。もう40歳後半の自分だけど、小学校1年生からでもいいから戻ってもいい。いや、戻りたい」という話をしてくれました。

何気ない会話で、本人はそんな話をしたことすらおそらく覚えていないと思います。ただ、自分にとっては雷が頭上に落ちたような衝撃で、今でも忘れられません。その日の夜もその衝撃の余韻が強く残っており、インターネットで何気なく検索していました。正確には覚えていませんが、おそらく、「途上国」「教育の機会」「支援」等の思い付いたままのキーワードだったと思いますが、「国際教育開発」という単語に出会いました。これはどうしたらできるんだと思ったら、国連というのが一番先に出てきて、よしじゃあ、国連だ。では国連はどうやって入れるのかと調べたら、修士の資格と関連経験が必要ということで、じゃあ修士と、そして教育の経験をもう一回積み直そうと思って、次の日に職場のレストランへ戻って、朝一で自分の意思を伝えました。「すみません、ヘッドシェフ。店を辞めます」と。「ほう、そうか。」「はい、そうです。ちょっと違う夢を見つけました」ということで、一晩で方向転換をしました。

その後、詳細は省きますが、夢を現実にするために、世界を変える国際支援をしたいと思って修士と関連する職歴を歩みだして国際支援の道が始まりました。ただ、最初はとにかく国際支援ができれば何でもいいのかという様子でしたが、色々な組織で仕事をしているうちに、自己紹介のところでも軽く触れましたが、教育でもライフスキルが大事だなと思い、読み書きを越えた教育の推進をしたいなと。21世紀スキルだとか、多面的教育、クリエイティブ教育というのが大事なんじゃないかなと思うようになりました。

それと並行して、やっぱり教育に従事する立場として、自分自身も学び続ける人間でありたいなと。もともと学びが好きというのがありますが、言語も独学で勉強して、色々な分野の学びに関するブログなどを通して、色々なストーリーを仕入れてどんどん人に伝えていけたらなと思ってやってきました。そしてここまでの10章の最後ですが、国際支援とはいったい何なのかと今でも考えることです。変化、気付き、学びというように色々思うところがあります。次は私が思う国際支援とは、という話に移りたいと思います。

(4). 国際支援とは

そこで、私の話の前に皆さまに質問ですが、「国際支援」と聞いて思い付く一語を、何でもいいのかでチャット欄にタイ

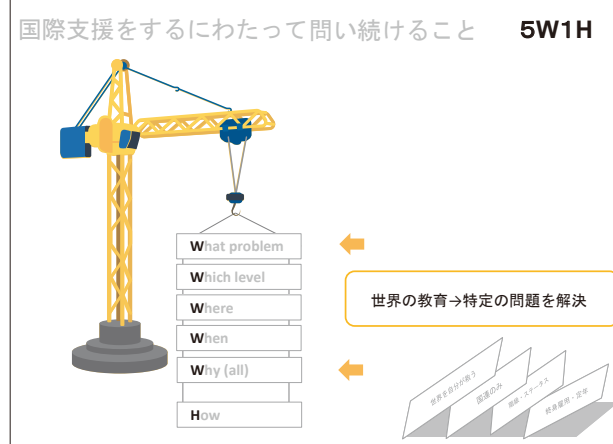
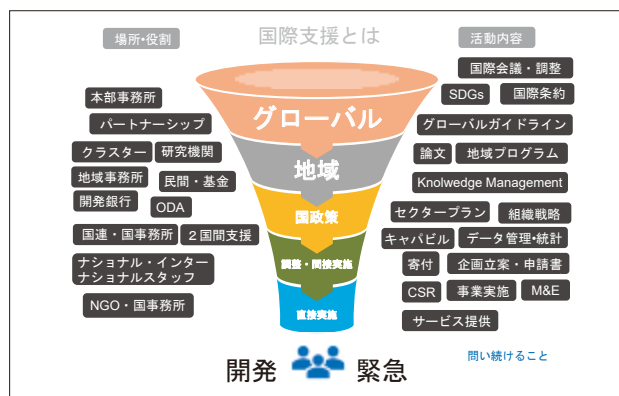
プしていただけますか。

(しばらくして、チャットから様々回答が出てくる)。

ODA、食糧、貧困、格差、JICA、パートナーシップ、途上国、友達づくり。国際支援という言葉から色々な言葉が連想されるようですね。まだまだ出てきますね。他には・・・先進国から後進国へ、NGO、寄付、相互依存、分かち合うこと。なるほど。素晴らしいですね。

私もいろいろ考えてみて、このスライド（下図）に羅列してみました。まだまだ出てくるかと思いますが、そこで気づいたのは、国際支援というのは、すごくいろんなレベルのものがあということです。真ん中の筒のようなイメージであるように、上からグローバルレベル、地域レベル、そこから国政策、調整・間接実施、直接実施でターゲットに届く。そして国際支援で無視できないもので、私も始めた当初はあまり知らなかったのですが、開発支援と緊急人道支援というものの。緊急というのは、紛争だったり、難民問題、自然災害だったり、あと、疫病などで、今では世界中がコロナ禍にありますよね。今までは開発と緊急は結構はつきり分かれている傾向があり、それはそれで課題の一つでしたが、このコロナ禍ではその境目が難しくなっているという事態が起きています。

スライドの左側は、場所・役割、右側は活動内容ということで、グローバルから直接実施、本当に裨益者に届くまでにはいろんな段階を経ています。例えば、UNICEF だったらニューヨークに本部事務所がありますが、世界の色々なところに地域事務所と国事務所があります。また、先ほどチャットであったような ODA や NGO 等。右側は、国際会議や、そこで締結されるような条約や国際的な目標である SDGs などがあり、少しずつ下に下りていくうちに、先ほどチャット欄にあった寄付というのも一つの支援の形ですね。してサービス提供。この真ん中の逆三角形の筒のようなイメージは、また後で出てくるので覚えておいていただければと思います。そうして色々なレベルで色々な業務に携わってきたなかで、国際支援に関して問い続けることというお話



をしたいと思います。

自分の中で問い続けていること、というよりはずっと問い続けていきたいと思っていることがあります。それは 5W1H で、何の問題 (what)、どのレベルで (which) 取り組むのか。先ほどグローバルから国と、色々なレベルがあると話しましたが、どの場所でやるか (where)、いつやるのか (when)、なぜそれをやるのか (why)。その中でも、私はこの「なぜ」というのは、どの質問にも問い掛けていかなきゃいけないなと思っています。そして最後に How、言い直すとどの機関でどうやってやるのかということですが、これに関しては最後に決めてもいいのかなと思っています。

(上図の) スライド右下にもあるように、いろいろな経験を経て、世界を自分が救うとか、国連のみしかないとか、階級、ステータス、終身雇用、定年というのは、何か違う、もしくは自分には興味がないと思うようになりました。今自分が一番大事にしているのは主に2つ。どの問題に対して (what)、なぜ (why) 取り組むのかというのは、ずっと問い続けていきたいと思っています。先ほどの自己紹介のところでも申し上げましたが「世界の教育を変えるぞ」と意気込んでいたのが、今は、「特定の問題を解決できないかな」というような考えに至っています。当たり前のように聞こえるかもしれませんが、国際支援は国連しかない、世界を変える、と決意した当初からするとこれも学びです。次は、もう少し具体的な国際支援の話を、教育のケースでお話したいと思います。

(5). 国際教育開発のトレンドと課題

ここでは国際教育開発のトレンドを、個人的な見解で図にしてみました（次頁下図）。同分野も、時代とともに、優先順位が変わってきていると思います。例えば、最初のほうは初等教育にアクセスできることを目標にし、それと並行して学校や教室を建てたりする一方、障がい者は分けて特別

支援教育を行うというもの。その後、少しずつ就学前教育やノンフォーマル教育、そして今では全ての子どもを同じ環境で教育するインクルージョン、水や保健を学校で充実させるといったクロスセクターの動き、イノベーションというのもあります。

皆さんも SDGs という世界が掲げる目標は聞いたことがあるかと思いますが、その前に MDGs というのが 2000 年から 2015 年までありました。色んなセクターが掲げた途上国支援の 8 つの目標で、教育では、全ての子どもに初等教育を普及するというのが MDGs の目標の一つにあたります。その後に出てきた SDGs というのが 2015 年から 2030 年までの目標ですが、こちらは先進国も含めた世界の目標で、目標の内容も 17 に増えました。ただ、こういった世界の開発目標というものととても大事ですが、緊急下の教育というものを避けては通れません。特に途上国は、紛争や難民問題、自然災害、エビデミック等からネガティブな影響を受けやすく、そしてなかなか復興しにくい傾向にあります。今はコロナ禍なので皆様もしっくりくると思うんですけども、そういう中で、こつこつと山を登り続けてきたような開発と、このいつ来るかわからない雷のような緊急というのを、ネクサス、つまり繋げて考えないといけないというグローバルなトレンド

と課題があります。ただ、それも、私の見解では、突き出している氷山の一角にすぎないんじゃないかなというところなんです。

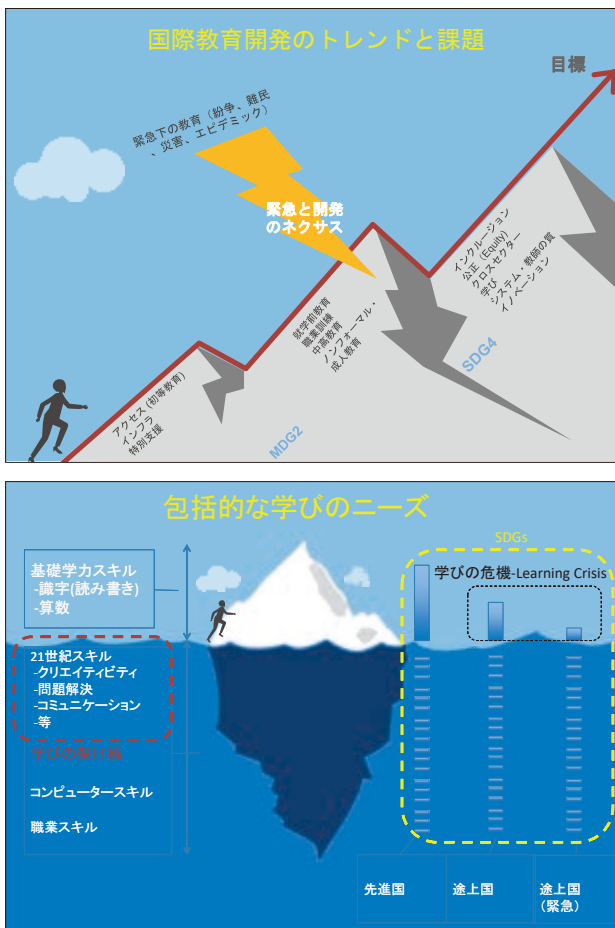
それはどういうことかといいますと、包括的な学びのニーズという話を少しさせていただきます。世界中の国を、先進国、途上国、緊急下にある途上国という 3 つのカテゴリーに分けるとします。教育に関しては、特に途上国における学びの危機 (Learning Crisis) が問題視されています。ということかと言うと、前までは学校に送り出すことを目標にしていたところが、実は学校に行っても基本的な読み書き算数ができていない子どもがいっぱいいるということです。例えば、小学校最後の時期である 10 歳までに基本的なレベルの文章を読めず、理解できない子どもは世界の中・低所得国家では 5 割以上、貧困国家ではこれが 8 割ほどになっているということがわかっています。これは勿論何とかしないといけない課題ですが、教育開発の分野では、読み書き・算数といった基礎学力スキルに特化したものを「学び」と見なす傾向がまだあるように思えます。

実際のところ、教育で養うべきスキルというのはいろいろあると言われています。先ほど少し申し上げましたライフスキルや 21 世紀スキルといった、クリエイティビティ、問題解決、コミュニケーションなどから、コンピュータスキルや職業スキルまで、今は本当に多くのスキルが求められています。そういうところも踏まえていかないといけないのですが、そういったスキルは読み書き算数に比べて評価するのが難しいというのも課題の一つになっています。もちろん、それだけじゃないですが。

それで、先ほども触れましたが、SDGs が MDGs と一番違うのは、前者には先進国も含まれているというところで、日本も含めて、世界中がこれらの包括的な学びのニーズを見逃しては、今後、SDGs はもちろんこれからの社会に適応できる市民や人材作りを達成するというのは難しいというのが私の見解です。その中でも、21 世紀スキルは学びの懸け橋だと言われています。例えば、クリエイティビティがあれば、読み書き算数、そしてこれから変化すると言われているジョブマーケットの専門的なスキルアップにも繋がる。問題解決、批判的能力、コミュニケーションスキルも然りといったところです。私自身の人間性やこれまでの背景・経験に関わってきますが、可能な限り 21 世紀スキルの分野で貢献していきたいと思っています。次は、私のこれまでの国際支援の経験を掻い摘んでお伝えします。

(6). ストーリー編：4 大陸・6 勤務国・36 カ国への国際教育支援を通して得た学び

実はここが私の講演の目玉になると個人的には思っている



のですが、この世界地図が、これまで私が携わった国際支援の概要です。勤務国は青い6つの国、支援に関わった36カ国はグレーということで、これらの6つの勤務国におけるストーリーのタイトルをお見せします。その後、参加者の皆様に、どの国のどの話を一番聞きたいかというのを投票形式で選んでいただき、一番人気のあるもののお話をさせていただきます。

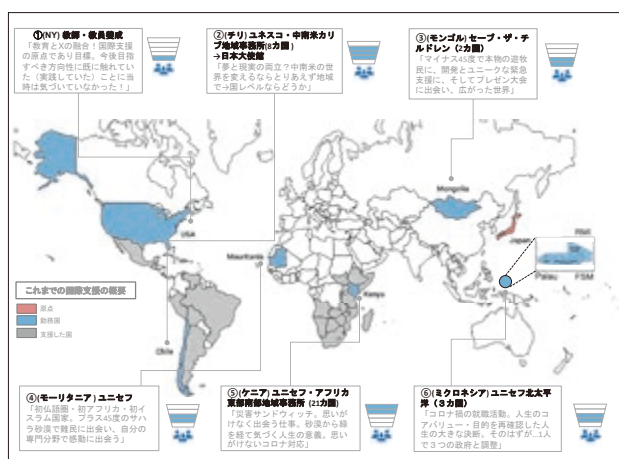
(アニメーションで左上から順に①、②と見せていく)。

一つ目、ニューヨークで教員養成、教師として働いた経験からのストーリー。ここでは、「教育と何々の融合、国際支援の原点であり目標である。今後目指すべき方向性に、実は既にそのとき触れていたこと、そして実践していたことに、当時は気付いていなかった」ということについてお話しします。

2番目はチリ。ユネスコのラテンアメリカ・カリブ諸国の地域事務所における8カ国への支援。①と②の大きな違いとしては、支援のレベルが違うということ。先ほどお話しした逆ピラミッドみたいな筒のイメージでいろんなレベルの支援があるというお話をしましたが、各ストーリーのタイトルの右にある同様の筒で、それぞれのレベルを表しています。例えば、NYでは子どもに直接教える立場にいたので被益者に一番近く、そしてチリのユネスコ地域事務所では複数の国を支援するという位置付けなので少し遠くなり、ユネスコの次に同国の日本大使館でも勤務し、そこでは少し被益者に近づいて国の支援をするというものでした。

3つ目がモンゴル。ここは国際NGOのセーブ・ザ・チルドレンという団体に勤務しました。「マイナス45度で本物の遊牧民に、開発とユニークな緊急支援に、そしてプレゼン大会に」とあります。ここでは直接支援をしていたので被益者にかなり近いです。

4つ目は西アフリカのモーリタニアですね。初仏語圏、初アフリカ、初イスラム国家、初ユニセフ、プラス45度のサハラ砂漠で難民に出会うと書いてあります。



5つ目に、ケニア。こちらも地域事務所ですが、21カ国を管轄しています。「東部南部地域事務所、災害サンドイッチ」云々とありますが、これが選ばれたらこのストーリーをお話させていただきます。

6つ目、そして最後が現職のユニセフ北太平洋。ここは3カ国、パラオ、マーシャル諸島、ミクロネシア連邦という三つの小さい国の政府をサポートするために、北太平洋事務所の唯一の教育スタッフとして、教育プログラムをリードしています。

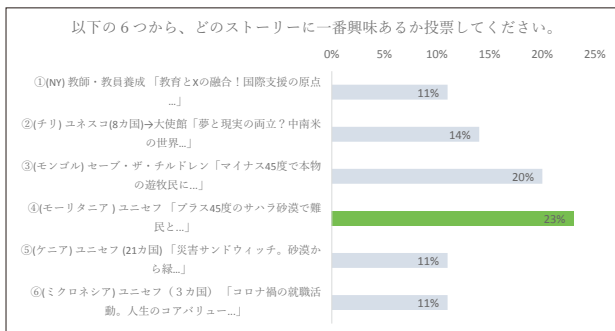
さて、6つの簡単な紹介が終わったということで、投票形式のアンケートを取りたいと思うしますので、一番聞きたいと思うストーリーを選んでいただければと思います。時間が許せば、またこのスライドに戻ってきて、再度投票を行います。基本的には、テクニカルにこんな仕事をしていましたというよりは、そこで得られた課題ややりがいといったものをストーリーとしてお伝えできたらなと思っています。それでは投票をお願いします。

(投票からしばらく経って結果が出る)

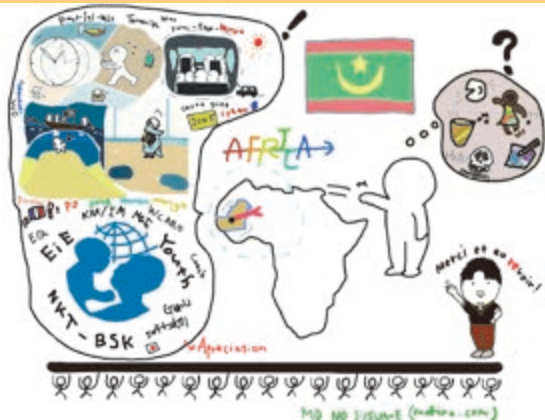
(7). ストーリー編：モーリタニア。プラス45度のサハラ砂漠で難民と

はい。ということで、結果はこの通りになりました（次頁上画像）。なるほど。一番人気は「モーリタニア（ユニセフ）、プラス45度のサハラ砂漠で難民と」ということで、こちらのスライドに飛びますね。

6勤務国の1つを紹介させていただきますが、私はそれぞれの勤務国に行ってからその地を出るときに、その国での思い出を1枚の絵に描くようにしています（次頁下画像）。このストーリーは絵の右上の「？」といった序章から始まります。どうということかという、初アフリカということで、赴任するまでに色んなアフリカ像を描いていました。例えば、私はダンスや音楽をやっていたので、色んなジャンルのアートの原点でもあると言われる憧れのアフリカ。そして、フランス語を独学でしていたこともあり、ぜひ仏語圏に行き仕事をしたかった。陽気でお喋りをするアフリカ人の様子。いろんなアフリカが頭の中でぐるぐる回っていました。しかし、実際に行ってみたら、音楽もダンスもあまり盛んではない国で、自分が思っていたようなアフリカ像とほぼ違っていたことを覚えています。そんなスケールの大きなアフリカの一つ目の国は、砂漠が9割以上のモーリタニアという国です。イスラム教徒が100%で、しかもその前に私が勤務していたモンゴルの気温がマイナス45度、そこからいきなりプラス45度のサハラ砂漠です。今回ご紹介するストーリーは、そのモーリタニアで難民支援の業務の一環から感動に



④(モーリタニア) ユニセフ 「初仏語圏・初アフリカ・初イスラム国家。プラス45度のサハラ砂漠で難民に出会い、自分の専門分野で感動に出会う」



出会うというものです。また、これからお話するような話も含めて、色々な仕事や経験をしてこられたのは単に色々な人に支えられているからというのを忘れないように、絵の下にはいつも支えてくれている人たちを表現するようにしています。

さて、本題ですが、UNICEF モーリタニアで担当させていただいた業務の一つが難民支援でした。マリから来た難民が約6万人おり、難民がやってきたところには難民キャンプが建てられ、学校や医療施設が設立され、飲み水や子ども保護のためのサービス等が提供されていました。難民と聞くと、大変そうだなという人もいらっしゃると思います。確かに難民の方のおかれている境遇はどれも大変で、いつ帰れるか分からないという不安な思いを常に抱えており、色々な分野における支援のニーズはあります。ただ、初めての難民支援で私もそれまでよく知らなかったことですが、難民キャンプの周りの人も大変な思いをしているということです。例えば、日本のつくば市というところに違う国の難民が来て、市内に難民キャンプが作られると仮定した場合、つくば市はホストコミュニティと呼ばれ、何らかの形でつくば市民も影響を受けます。マリ難民キャンプは、世界でも有数の貧困国家であるモーリタニアのホストコミュニティの中にあることを、支援側は見落としがちでした。

ホストコミュニティからすれば、貧しい自分たちの町に支

援団体が入ってきたかと思うと、難民のための支援をして出ていく。それが何年も続く。そこでホストコミュニティの人たちは、自分たちはあまり支援されていないということでストレスが溜まっていたということ。もちろん難民に対して寛容でありたいと言う気持ちは持っているのですが。国際支援側も、首都から1,300 kmくらい離れたホストコミュニティに、緊急支援に使用される国連機を利用して限られた時間の中で難民支援やモニタリングをするという事情があることもあり、なかなか現地にいったときでも自由な時間を過ごすことができません。そして、同コミュニティは、セキュリティの警告レベルが最大であり、全ての移動は憲兵隊が引率する車両2台以上のコンボイ体制で行わなければいけません。そのような背景の中でも、私がホストコミュニティのモニタリングに力を入れたいとお願いして、この目で難民キャンプとホストコミュニティの様子を見定める機会に恵まれました。もちろん、全てを一つにまとめることはできませんが、モニタリングで気づいたのは、難民キャンプには学校や医療施設は最低限ありますが、ホストコミュニティはほとんど何もないという村が少なくないという現実でした。やはり支援をするに当たって、ドナーの資金や寄付も難民教育には下りやすい、もしくは支援対象になりやすい。一方でモーリタニアという国土が大きい貧困国家に支援が全体的に行き渡るのも一筋縄ではありません。

そういう背景のもと、私が関わったのは、難民キャンプとホストコミュニティの両方に支援を充実させるという業務でした。そこで今回ストーリーとしてご紹介したいのは、私が難民キャンプとホストコミュニティで実施した様々な表現を交えたワークショップにおける出会いです。これは、元々難民キャンプ対象に計画されていた作文ワークショップを、読み書きができない若者がいることを考慮し、作文だけでなく、詩、絵、演劇、ダンス、討論等、複数の種類の表現力を参加者が学べるという内容に変更して、実施した活動です。また、活動地に関しても、ホストコミュニティ2カ所と難民キャンプ1カ所と、重点をホストコミュニティにおいて実施することにしました。それまで支援団体が単発で表現力を伸ばすためのワークショップを実施することはありましたが、同じ子どもが複数の方法の表現力を学ぶことができるワークショップを実施することはもちろん、ホストコミュニティを優先するというのは今回が初めてでした。

まず、この左上の写真は、現地調査に行って、どんな活動で表現したいのかを聞いたところ、既述のような色々な種類のものが挙がってきました。自分たちが選んだ手法を通して今の自分たちを表現するといったものでした。私はダンスをしていたというもあり、ダンス枠の講師になりました。実



は、ユニセフの職員として、こういう現場で実際に体を動かしてワークショップを実施するというのはあまりないのですが、流れで参加することになりました。

以上のような背景の中、今回お伝えしたいストーリーというのは、この左下の写真にまつわるものです。この写真は、ホストコミュニティでダンスのワークショップをしている様子です。その地域に根付いた音楽を流してダンスをしていた途中に、この右手を上げている男の子が、別の部屋で参加していたお絵かきワークショップから抜け出してこっちにやってきました。どうしたんだろうと思ったら、その子がすごい笑顔で踊りだして、私も含めてみんなとても驚きました。

なんでそんなに驚いたかという、この子は、ちょっと写真では見にくいんですけど、左足がないんですね。お絵かきワークショップで絵を描いていたけれども、流れてくる音楽を耳にして、踊りたくて仕方がないと思い、飛び出して来たんですね。けんけんしながら、片足で。ほかの子どもたちは皆、驚いているんですね。びっくりしていた私も状況が飲み込めた後、その子どもを大歓迎し、一緒に楽しく踊る雰囲気を作ったところ、すごく盛り上がったんですね。この子はこの日のヒーローになりました。

その中で、その子が片足でいて、私もそれに混じって一緒に踊っている映像が15秒ぐらいあるので、それをちょっとお見せできたらと思います。片足の無い彼と一緒に、私も

片足で一緒に仲良く踊っているという感じのところなんですけど、少々お待ちください。

<動画リンク>

<https://www.youtube.com/watch?v=PFu1xgePVxs>

という感じで、私もそれまで片足で踊ったことがなかったので、自分でも何をしているかちょっと分からなかったんですけど、その子のまねをして楽しく踊れました。

ワークショップが終わった後、どうしても気になったので、その男の子に話を聞きにいったんですね。「今日は絵を選んでいたみたいだけど、途中でダンスに来てくれたけどどうしたの？楽しかった？」と聞いたら、「僕は、すごくダンスが好きだ」と。彼はこう続けました。「でも、（モーリタニアの）僕の村は伝統的で保守的だから、片足がない障がい者は差別をすごく受ける。こういう田舎の農村地だとなおさらだし、だから人前で踊るなどあり得ないから、これまで外で踊ったことがなかった。でも、今日は音楽を聞いて我慢できなくなったから、飛び出てきたと。先生のあなたが僕を歓迎してくれて、参加までさせてくれたことですごくうれしかったから、今日を境にこれからもみんなの前で踊りたいと思う！」ということを満面の笑顔で言ってくれたんですね。

僕は感極まって、この子と出会えて本当に良かったと思いました。ダンスをやっていてよかった。国際支援や夢を描い

たアフリカ、そして独学のフランス語を追って、モーリタニアを選んでよかった。難民だけでなく、ニーズが高かったホストコミュニティも支援に入れてよかった。その子が絵をそのまま描いていたらこういう出会いもなかったということで、飛び出してきてくれてよかった。偶然が重なり合って、こういう素晴らしい出会いに恵まれました。

・・・ということで、ここでは偶然の出会いに関するストーリーをご紹介します。いただきました。

(8). ストーリー編：モンゴル。マイナス45度で本物の遊牧民に

(元の世界地図のスライドに戻る)

まだ時間的にもうひとつくらいはストーリー紹介ができると思うので、もう一回、先ほどのモーリタニア以外で選んでいただければと思います。

(投票中)

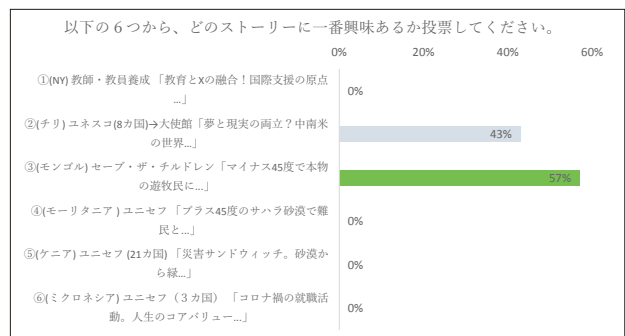
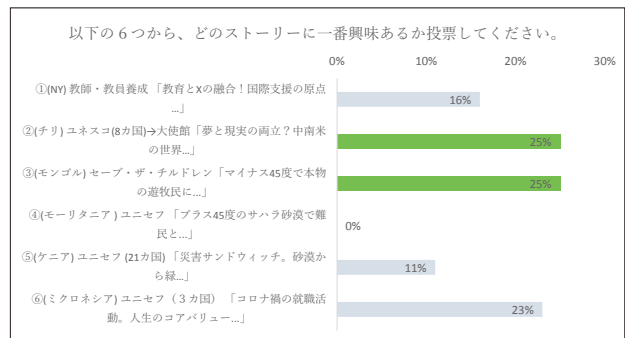
なるほど。今、二つの選択肢が同率を……。はい、これは面白いことになりましたね。すみません、こんな結果になりました(右上図1つ目)。もう一回、2番か3番、つまりチリかモンゴルかで選んでいただけたら幸いです。もう一回やりますね。

(投票中)

はい。ありがとうございます。結果は、このようなかたちとなりました(右上図2つ目)。では、モンゴルの話を少しさせていただければと思います。「マイナス45度で本物の遊牧民に、開発とユニークな緊急支援に、そしてプレゼン大会に出会い、広がった世界」というちょっと長いタイトルですけれども、お付き合いください。

これもモーリタニア同様、モンゴルの思い出を1枚の絵に描き、絵の下には支えてくれる多くの人があります。多分、私以外はなかなか分かりにくいと思うので申し訳ないですけれども、ここでは、なぜモンゴルで、そしてモンゴルで何ををしたかということについてのストーリーを紹介したいと思います。

私は一人旅が大好きで、ずっとバックパッカーをしていたこともあり、「遊牧民みたいだね」と人から言われることがありましたが、遊牧民に出会ったことがないということで、是非生きていううちに本物に出会いたいという思いがありました。それがモンゴルを選んだ理由の一つです。仕事は、小学校の教育における開発事業を担当しており、途中でモンゴル特有の緊急災害が起こり、色々な流れがあり、プレゼンコンテストがあり、世界が広がった。そんな話をさせていただきます。



ゾドというモンゴルの災害で 被害を受けた遊牧民の子どもの物語

ゾドというモンゴルの災害。漢字で書くと「寒雪害」、寒さと雪の災害。モンゴルは3-4割はまだ遊牧民がいるといわれている、すごく国土も大きな国で、そのゾドの被害を受けた遊牧民の子どもの物語というタイトルです。

(ここから色々な絵を見せながらストーリーテリングを展開) モンゴルと聞いて、ぱっと皆さん思い浮かぶのかもしれないんですけど、広い緑の大草原に青い空、モンゴル特有の丸いゲルという伝統住居に家畜、羊だったり馬だったりというのがいるんですけど、遊牧民の子どもの物語というのは、いろんなところを親と遊牧しています。学校はというと、村や集落の中心に学校があつて、そこに学生寮もある。遊牧民の子どもは、早くて6歳くらいから親元を離れて寮で暮らしながら学校に行くという、よく言えばすごく遅い、言い換

えればとても困難な環境で学校に通います。モンゴルの冬は8ヶ月以上あるといわれており、マイナス50度を超えることもあります。そのような厳しい環境の下で、幼少のころから親元を離れるのは、自分の子どもの頃を考えると信じられませんが、そういう国なんですね。今回のストーリーの主人公は、この男の子、仮名でドルジ君にします。

さきほど、寒雪害・ゾドというユニークな災害の話をしていましたが、何が起ころかという、大体、夏に干ばつが起こって、家畜の食物が育たなくなり、すごく寒い冬が来て、家畜がどんどん弱って行って死んでいく。それが遊牧民の家計なり生活に悪影響を及ぼすという、ユニークな災害なんですね。地震とか洪水で家が崩れたとか、そういう自然災害ではなく、少しずつ、家計を支える家畜がじわじわ苦しみだすというもの。

冬になって、大体の遊牧民の子どもは学校の長期休暇を使って、寮から出て親元に帰ってくるんですね。長期休暇が終わってほかの子どもたちが帰ってきたにもかかわらず、遊牧民の家庭によっては、親の仕事を手伝い、赤ちゃんを産む家畜や少しずつ弱っていく動物の世話とかをして、学校に戻れないという状況になる子が結構いるんですね。その中で、当時の勤務先であるセーブ・ザ・チルドレンでは、ドルジ君のような子どもが学びの遅れを取り戻せるように支援をしました。

どういう支援をしたかという、遊牧民の子どもで3週間以上、長くて数ヶ月学校に戻れなかった子どもたちを対象に、学びの遅れを取り戻すための補習授業を行いました。他にも色々な支援をしたのですが、このストーリーでは補修授業を扱います。それまで補習授業というのは、アドホックといえますか、先生次第でやる人もいればやらない人もいるというもので、システマチックにやるという習慣はありませんでした。そこで教師の方にも、どうすれば子どもの学びの遅れを評価して、それを個人レベルでサポートするかに関するツールや研修を通して教員養成にもつなげました。その結果、子どもだけじゃなくて先生にも学びになったということで、実際のモニタリング・評価活動でも子どもの学びの遅れを取り戻し、かつ先生のスキルアップにもつながったということで、大きな成果が出せたと言われています。

私が、その支援の後に、モニタリングの出張に行った際、色々な先生や子どもに話を聞いたんですけど、ある先生が、「ドルジ君に手紙をもらったんです」とすごく喜んで言いにくくれたんですね。私はモンゴル語を読めるまでにはなかったのですが、英語で訳してもらったところ、以下のような内容でした。

「先生、ありがとうございます。自分が知らなかったことを教えてくれて、

本当にありがとうございました。大好きです、先生！」

その先生が、嬉しそうに、そして誇らしげに「これ、もらったんですよ」と言っているのを見て、私も心を打たれました。そしてその後、ドルジ君に会いに行ったら、私達にも手紙をくれたんですね。そうしたら、その手紙の内容は、以下のような内容でした。

「セーブ・ザ・チルドレンのお兄さん、お姉さん、本当にありがとうございます。遊牧民という立場でいながらも、実は勉強をしてやりたいこともあったけど、正直、ゾドが起きたときは、やっぱり家の手伝いが優先になるから、ちょっと夢は諦めかけていた。だけど、今回のこの支援でちょっと取り戻せたというところもあって、夢を諦めないでいられるようになったのはすごくありがたいと思います、ありがとうございます。」

それは私も、さっきのモーリタニアの子と同様にすごく心に残って、今でも「ありがとう」とモンゴル語で書いてあったのは覚えています。それくらいの単語は読めるので。

という話でしたが、実はこの話、実際にプレゼン大会で私が発表したストーリーなんです。と言うのも、セーブ・ザ・チルドレンは大きな国際NGOで120カ国以上で事業を運営しているんですけども、各大陸ごとをまとめている地域事務所のワークショップや集まりというのがあるんですね。そこで、モンゴルを含むアジア、太平洋諸国地域の20カ国以上の事務所から、「災害と教育」というテーマで代表者が地域会議に集まり、それぞれの国の事例の紹介や地域レベルでの戦略に関する議論などが行われました。同会議のプログラムの一つに3分間で自分たちの国の事業をクリエイティブに伝えるプレゼン大会というのがありました。私はモンゴル代表でした。同地域は自然災害が多いこともあり、大規模な災害とその支援に関する膨大なデータ等では太刀打ちできないことはわかっていたので、先ほどお伝えしたドルジ君の話を、テクニカルな部分も網羅しながらも、他の誰かがやらなさそうな、絵を描いてストーリーを紹介するという紙芝居のようなことをして演劇も交えながら実施しました。すると、この大会で優勝することができて、賞金5,000ドル、日本円で言ったら50万円強くらいをいただきました。もちろんそれは事業に使いましたが。

それで、最後に、少しモンゴルの写真をご紹介します。左上の写真は、2ヶ月ほどしかない夏の大草原の様子です。都会にいと見れないような360度見渡す限りの大草原。モンゴルは首都から離れると大体どこへ行ってもこんな映像が見られるという素晴らしいところなんですけど、右上は冬。寒い冬の出張時の様子です。車で片道10時間くらい移動することもあり、休憩するときは、モンゴルのウオッカを飲んで体を温めるというシーンです（笑）。このウオッカ



をすごうれしそうに持っている人は、その地域の教育課の所長さんですね。一緒にモニタリングの出張に行って、休憩時はこんな感じでお酒を飲んでいるという、これぞモンゴルといったところでしょうか。もちろん運転手は飲みませんが。

左下の写真は、先ほどご紹介した補習授業に参加した子どもたちに、「みんな、学びの遅れを取り戻して、これからも頑張るぞ」という呼びかけに対して皆が「おー!」という感じで返しているところです。

右下は、実はラオスです。「なぜラオス?」と思われるかもしれませんが、先ほどお話ししたプレゼン大会で優勝して、クリエイティブなことに注力していることを認められ、他の国の人から、ラオスに来て仕事を手伝ってくれないかと頼まれました。2-3週間ぐらい行ってきたんですけれども、仕事内容はいくつかありましたが、例えば、防災に関する歌をそれまでに作ったけど、子どもたちがそれを覚えられないから、クリエイティブな方法で歌を覚えてもらうようにしてほしいというところでした。そこで私が実施したのはあくまで主役である子どもたちに、普段何が好きかと聞いたら、みんな踊るのが好きと言ったので、振り付けも子どもたちに考えてもらって、それをファシリテートする役割にしてみました。この写真では、洪水などの災害が起きたら安全なポイントに、丘の上まで行って身を守るみたいな、そういうところなんですね。ダンスと教師の経験がこんなところで生きるとは思ってませんでした。

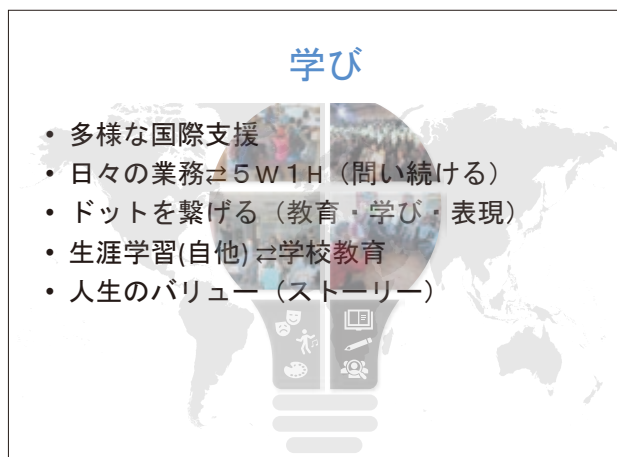
まとめると、遊牧民に惹かれて行ったモンゴルで、遊牧民のための災害支援に携わることになり、そこで行った補習授業を通して出会った感動的な思いをプレゼンにぶつけ、それが思いがけない展開で私をラオスに連れてきて、そこでまた子ども達と一緒に学んだ、という、色んな出会いが詰まったストーリーでした。

(9). 学び

ということで、そろそろ締めめの時間になりましたので、本日用意した6つのストーリーのうち、2つをご紹介させていただいたということで、私の講演のまとめである学びに入ります。

いろいろ自分の話や仕事の話をしていただきましたが、その中で得られた学びというのを簡単にご紹介させていただけたらと思います。

多様な国際支援。これは本当に、先程もお話しましたが、自分が始めたころは、キッチンで受けたあの衝撃の日の夜に、国際支援、国連だと決心しましたが、やっぱりNGOや実際の教育現場、ドナーでもある大使館等、そういう違う視点とかを見ていると、国際支援というのはいろいろあるなと。そして、これも重複しますが、本部レベルから地域、国レベルでも調整役から実際に実施する国際支援と、色々ありますね。もちろん、国際支援の職業に就かなくてもできる寄付だったり、ボランティアだったり、ほかにいろいろできること



はあるので、国際支援＝国連だと思っていた当初と比べると色んな意味で世界が広がったと思います。

次は、日々の業務で、5W1H (問い続ける)。よく聞かれるのは、「国際支援って、実際、普段の1日でどんな仕事をしているんですか。」ということですが、基本的には事務作業といいますか、椅子に座って一日中パソコンを眺めてプロジェクトを企画開発したり、他の誰かがまとめた文章にフィードバックをしたり、それを書き直して提出したりという作業が多いです。そういうことをずっとしていると、大事なことを忘れがちになるというのはすごく思います。そこで大事なのが5W1H。世界にいろんな問題があるという話を少ししましたが、自分は何の問題を、そしてなぜそれをやりたいかというのを問い続けないと、日々の業務に飲まれてしまうなというところは気付いたんですね。

次、ドットを繋げる。これはスティーブ・ジョブズも言っていたことですが、私は国際支援に関して主に教育分野でやってきましたが、実は、少し振り返ってみると、教育者だけでなく、生涯学習者とパフォーマーといったように、自己紹介で申し上げた内容の全部が含まれて今の自分がいます。今の国際支援において、先ほど申し上げました21世紀スキルとか、そういう今後必要と言われるものを少なからず推進し、今後も貢献できるとするのは、やっぱりそういうドットを繋げたからなのかなと思うんですね。だから、「国際支援をしたい」というのが参加者の皆様からの事前アンケート回答にも結構ありましたが、本当に、仕事、仕事、仕事だけではなく、自分がどういう人間で、何をなぜやりたいのかというのを考えてきたし、これから考えていきたいです。今までやってきたこと、これからやりたいことをつなげて、1人の人間としてこういうかたちで国際支援をしたいというのがあっていいし、あるべきだと私は思っているんですね。

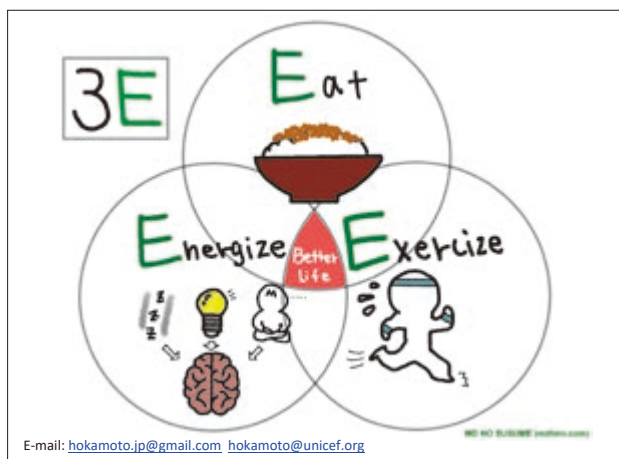
次は、自分も他人も含めた生涯学習 VS 学校教育。冒頭で、私は好奇心が旺盛だったけれど、学校内ではあまり学

びがなかったというお話はしました。実際に私が教師、そして教員養成トレーナーという仕事をして気づいたのは、先生である自分が大したことを言っていないで、子どもたちはそれについてきてくれるので、自分が偉いと錯覚してしまいがちだと感じました。そして、周りの先生を見ると、常に自分を磨いて学び続けていきたいという姿勢を見せている人が、あまり多くなかったのも印象的でした。自分がしっかりと見ていなかったのかもしれませんが、とにかく、子どもに「学びましょう」と言っている先生自身も学んでいるところを見せると、一番説得力があるのかなと思い、それを常に意識していました。それは、大学を卒業した後に学ぶのをやめるというシステムになりがちな学校教育とちょっと矛盾するところがあるんですよね。そうじゃなくて、一生好奇心を持って学び続けられるような自分でいたいし、国際支援の中でも読み書き中心を推進している学校教育という流れがあるので、21世紀スキルなどを通して、生涯学習の基盤を作れるような貢献ができればと思っています。

最後ですが、私の人生のバリューはストーリーにあるということ。実は、今回はお話する機会がなかったケニアとミクロネシアのストーリーは、このバリューに関して掘り下げて話す予定でした。いろいろ思うところがあって、自分の人生というのは何が第一なのかというのは、国際支援をしてすごく思うんですね。というのも、違う国に行って、また新しく生活を直して、新しい同僚やカウンターパート、政府の人と仕事をして、国際スタッフは何年かしたら次の国に行くというところがあるので、人生の縮図を何度もやり直してみたいな印象を持っています。その中で、自分は本当に何が大事なのかという人生のコアとなるバリューがいくつかあって、その中でもストーリーというのをすごく大事にしていきたいなと思っています。

これから国際支援を目指される方、今されている方、何らかのかたちで貢献されている方もいらっしゃると思いますが、それぞれのストーリーというのはあっていいと思うし、私も、皆さんとこういうかたちでつながったのも何かのご縁なので、皆さんのストーリーを聞かせていただければなと思っています。

このスライド（上イメージ）で最後になります。いろんな国に行っているような仕事をして、大変な思いもします。皆さんも色々大変なこと、特にコロナ禍ではつらいことや思うようにいかないことがいっぱいあると思いますが、私がいつも言い聞かせて実践している、これから実践していきたいと思っていることを最後にご紹介できたらと思います。プレゼントというところとおこがましいですけど、「3E」といって、まずは Eat well、よく食べる。納豆はアフリカで私が手作り



したのを思い出して絵を描いているんですけども、自分の体の中に入れる食べ物は大事ですね。次に。Exercise well,そして Energize well。Energize というのは、それぞれ個人で異なる定義があつていいと思うんですけども、私の場合は睡眠をよく取って、学んで、あとは瞑想とかもするんですけども、脳を休めて鍛えるというのが私の中の Energize ということで、この三つの E がしっかりとバランスよくつながつて、良い人生というのが送れるんじゃないかなと思います。

最後、少し変わった終わり方になりましたが、この 3E も含めて今までにご紹介した絵は私のブログでも載せていますので、もし皆さんご興味がありましたら、MD NO SUSUME (mdhiro.com) まで。もしこの後の質疑応答でカバーできないご質問などございましたら、メールのほうを頂ければと思います。それでは、このようなかたちで一旦講演の中身を終わらせていただいて、質疑応答などに移らせていただけたらと思います。ご静聴ありがとうございました。

4. 質疑応答

山本 岡本先生、大変貴重で内容の濃いお話、ありがとうございました。さまざまな国際教育支援活動をご自身の学びという形で捉えて、活動されてきた軌跡がよく分かるお話だったと思います。皆さま、いかがでしたでしょうか。

本日はモーリタニアとモンゴルと二つの国のケースしか聞くことができなくて、個人的には大変残念でしたが、普段私たちがなかなか目にすることができない国際教育開発、特に教育現場での様子を、岡本先生の経験を通して見せていただいたような気がいたします。ケニアでの経験からの人生バリューについても非常に気になるのですが、またお話を聞ける機会があったらと思います。

それでは、この後 15 分ほど時間がございますので、ご聴講の皆さまからご質問やコメントを受けていきたいと思

います。本日のお話についてご質問ある方、どうぞ遠慮なく Zoom のマイク、可能であればカメラの機能をオンにしてお話しください。また、チャットボックスのほうでも随時質問のほうを受け付けますので、質疑応答中もそちらのほうに随時お書き込みいただけますよう、お願いいたします。質問のございます方はどうぞ遠慮なくご発言ください。では、白山先生、お願いします。

白山 岡本先生、本当に先生の人生そのものの中からたくさんの英知といいますか、学びを言語化してお伝えくださって、ありがとうございます。たくさん、先生のお話の中から気になったといいますか、学んだことを、私も書きながら聞いておりました。

それで、一つお聞きしたいのですが、先生は人生のストーリーということを言われました。これは、今日のご講演の中で非常に重要だと思います。この人生のストーリーというのをもう少し説明していただけるとありがたいなと思います。人生のストーリーを大事にしたいということだったんですが、そのストーリーというものをちょっと教えてください。

岡本 白山先生、ありがとうございます。そうですね。これは私の目標でもあるんですけども、基本的には自分の人生というのは何のためにあるのかなと思ったときに、残るのは家とか物、お金とかじゃなくて、自分がどんな人間で、どんな話を、どんな感動を人に伝えてきたかというのが大事なのかなと個人的に思っています。色々と人生の大事なコアバリューがあり、学びもちろん上位にあたるものですが、ストーリーというのが私の中で今のところ最上位にあるものです。

私は人の話を聞くのが大好きで、舞台、映画やアニメ・漫画等もストーリーですごく感動することが多いんですけど、やっぱりストーリーで感動を得るとことは人間に生まれたありがたみというか、自分もそういうストーリーを与えるような人になりたいというのが前提にあるんですね。いろんな国に行って、自分のストーリーだけでなくいろんな人のストーリーを集めて、自分がそれを人に伝えられるような存在で、自分の存在意義と言ったらあれなんですけれども、それを持てたらなと思っています。

そこで気を付けているのは、ストーリーをしっかりと蓄積する。What でしょうか。そのためにはいろんなところに動いていろんな学びを追求しないといけないというのはあります。ストーリーをまずストックするということでしょうか。

その次に、ストーリーを誰に伝えるか。Who というか、オーディエンスですね。いろんなオーディエンスのかたちがあつていいと思います。今日もこのような機会を与えていただきましたが、いくつかのストーリーを伝えさせていただく機

会だと思ってありがたく思っています。

最後は、ストーリーの伝え方、How ですね。どうやってより良くストーリーを伝えるか。そういう意味でも私はコミュニケーションツールである言語がすごく好きで、いろんな言語を勉強して、これからも学んでいきたいんですけども。あと、プレゼンやデザインも好きですね。国連の仕事が持つ課題にも関係してくるんですけど、やっぱり国連って、文書とかガイドラインとかを作ったら、残念なことに 100 ページとか 200 ページとか、文字だらけで、いいことがいっぱい書いてあるのに相手に伝わらないことが多い。読みたくもなくなるような長さのこともよくあるので、それは、デザインや伝え方というのはすごく大事なんだろうなと。

まとめると、まずストーリーを持って、相手がいるからこそ、そして伝え方をしっかりしているからこそ、ストーリーのテラー（伝え手）とリスナー（聞き手）の良い関係が成り立つのかなというふうに思っています。

白山 なるほど。どうもありがとうございます。

山本 それでは、一番最初に挙手していただいている本橋さん、ご質問、コメントしていただければと思います。

本橋悠人（東京大学教養学部生） いろいろ面白い話をありがとうございました。今日聞いていて、まず国際支援が上から下までいろいろなレベルのものがあってという話がある中で、今日聞いたお話はかなり現地に寄り添ったお話が多かったと思うんですけど、岡本先生自身は、そのような現場レベルでの仕事をいろんな国でやっていらっしゃっているのか、それとも、それこそガイドラインを書く様な仕事まで、本当に上から下まで全部やっていらっしゃってきたのか、教えていただきたいです。

岡本 ご質問ありがとうございます。今、これまでの経験を彷彿とさせるご質問だったんですけども、結論から言いますと、地域・グローバルレベルの仕事もあれば、国レベルの仕事もあり、そして子どもたちと寄り添って間近で仕事をするという機会もあったので、上から下までを経験しました。例えば、アフリカのケニアでは 21 カ国を管轄する地域事務所です仕事をしていたんですけど、逆にそういうのがなかったら、今回のタイトルにもある、36 カ国という大きな数字にできないと思います（笑）。その地域レベルでやりがいがあったと思ったのは、コロナが起こった時ですね。21 カ国のそれぞれで、自分の国はもちろん、他で何が起きているか分からないし、何をどうしたらいいかわからない。未曾有の緊急事態で。そこで、どこの国がどんなことをしているのか、1 分 1 秒を争う感じで情報が欲しいというのを、地域事務所として俯瞰的にものを見るポジションにいたので、ガイドラインを作りながらも、それぞれの国のサポートをしていました。

例えば他の国にケニアの事例を紹介し、ポルトガル語圏のアンゴラには、モザンビークで作成されたポルトガル語の情報を提供するとかですね。こういう情報はあなたたちの国には有益かと思うので提供しますみたいなことをやっていたんですね。そして、私は国レベルでも仕事をしてきたので、地域レベル・国レベルの違いを見ることができました。

本橋 ありがとうございます。

山本 ありがとうございました。それでは、チャットのほうにもいくつか頂いていますので、私のほうで紹介させていただきます。

近藤さんのほうから頂いているコメントで、「モーリタニアでのお話、大変興味深く聞かせていただきました。モーリタニアでのホストコミュニティの支援の重要性をお感じになられたいきさつを、もう少し詳しく教えていただけますか」ということなので、こちらのほう、お願いいたします。

岡本 はい、ありがとうございます。正直、私も、難民キャンプに行くまでは知らなかったことですが、難民キャンプに行くまでには、そのホストコミュニティの市長にまず会う必要があると言われ、ゲートキーパーということでもまずは挨拶に行き、その後に難民キャンプに行き支援の様子を見ろという感じなんですけれども、その市長に出会ったときにすごく印象的だったのが、「お前は何しに来たんだ」と、すごく高圧的な感じでこっちに言ってきたんですね。「お前はまた難民支援に来たのか」と。「それしかないのなら、次からはここに挨拶に来なくて良い」と言われました。

話を聞いていると、色々なドナーとか国際支援団体はホストコミュニティに入ってそのまま難民キャンプまで直通し、支援をして去っていく。だから、講演でも少し触れましたが、ホストコミュニティの中でもモニタリングをしました。そうしたら、ある村では、小学校はないけど、300 人小学校の学齢期の子どもがいる。「この子どもたちはどうしているのか。」と村長に聞くと、「何もしていない。」と即答。「緊急事態の病気になったらどうするの」と聞いたら、そこですごく衝撃的な返事だったんですけど、「難民キャンプの医療施設に行く。」と、これも即答でした。

そういうのを聞いて、言葉も出なくなりましたね……。難民はもちろん大変なんですけれども、それだけじゃないという、そういう視点も見えました。難民支援を長期的にするに当たって、ホストコミュニティへの支援がないとバランスの良い支援はできないなというのは、そこで思いました。

近藤高史（東京福祉大学留学生教育センター特任教授） どうもありがとうございます。私もパキスタンという国にいたことがありまして、そこにはアフガニスタンからの難民がたくさん来ているんですね。ただ、今おっしゃったホストコミュニ

ティの支援という視点が、考えてみるとあまり大きくクローズアップされてくることはなかったかなという感想を持ちましたので、今回こういう質問をさせていただきました。どうもありがとうございました。

岡本 ありがとうございます。ちょっと補足なんですけど、先ほど講演のスライドで開発と緊急のネクサスというところでお話させていただいたんですけど、やっぱり開発と緊急の両者のバランスを取らないといけないということです。モータニアという国で開発支援をするためにも、難民とか災害とか緊急支援もちゃんとバランスよく融合させて支援していかないと、長期的なサポートにはならないのかなと思っています。言うは易く行は難しですが。

近藤 どうもありがとうございます。

山本 ありがとうございます。では、もう一つありますのでご紹介したいと思います。中本さんからのご質問なんですけど、「料理人からキャリアチェンジということで、大変ユニークなキャリアパスに驚きました。国際支援のキャリア第一歩として実行されたことを、何か具体的にご教示いただければうれしいです」ということなんですけど、いかがでしょうか。

岡本 ありがとうございます。具体的な第一歩。実は、よく聞かれることがあります。私もこの業界に入る前はそうだったので分かるんですけど、私がそこで言うようにしてるのは、講演でも少し触れましたが、まずは何をしたいのか、何の問題を解決したいのかというのを知るのが大事なのかなと思います。そういうものが土台となり、軸となってくるのかなと思います。

例えば、UNICEF。私が今いる組織ですけれども、UNICEFは子ども支援に関わることは抜け目なく行っている団体だと思います。私は教育専門家として働いていますが、他にも水・衛生の専門家、保健や栄養の専門家、子ども保護、虐待とかのサポートの専門家がいっぱいいるですよ。だから、まずは中本さんがどの分野でどの問題を解決するのに興味があるかというのを知るのが第一歩だと思うんですね。

先ほども申し上げたんですけど、国連に関しては修士と関連する職務経験がミニマムの条件ではあるんですね。でも国連だけではなくて、青年海外協力隊といった JICA ボランティアや、大使館や外務省、NGO も国際支援にあたりますね。なので、どの分野で、どのレベルで、あと、5W1H を気にされて、なぜそれをしたいのかというのをいろいろ調べてするのが一番なのかなと。

具体的に、これが答えだというのがないんですけれども、やっぱり、支援にもいろんな支援があるように、キャリアパスにもいろいろあると思うんですね。ただ、何をしたいかとい

うのを問いかけるのが第一歩で、その思いに変化もあるので、私も同様の問いかけは常に続けていますので、お互い頑張りましょう。

中本真琴（千葉大学職員） ありがとうございます。

山本 中本さん何かございますか

中本 そうですね。私、実は協力隊の OB として、帰国後、大学院に進学して修士課程を持っているんですが、いったんライフ・ワークのライフのほうで子どもを産んだ関係で子育てに一度専念して、仕事から離れてた時期があったんです。今は大学の事務員として仕事に復帰をしているんですが、ここからどうやってもう一度国際関係、開発のほうにシフトしていったらいいのかなというのを、ちょっと迷っていたところでした。先ほどの先生のいろんなドットはつながっているというところにもありましたが、5W1H も意識しながら、キャリアシフトを考えていけたらなと思いました。ありがとうございます。

岡本 一緒に頑張りましょう。

山本 ご質問ありがとうございます。もう 1 件来ていますので、もう 1 件お願いしても大丈夫でしょうか。

岡本 大丈夫です。

山本 はい。英語のご質問なので、私のほうで簡単に日本語に訳しながらご質問をこちらでアナウンスしたいと思います。シャオさん、神戸大学の方ですね。「とても役に立つプレゼンテーション、ありがとうございます。ラオスでの教育支援のご経験について、もう少しお話ししていただけますか」ということなんですけれども、お答えいただけますでしょうか。

岡本 そうですね。先ほど少ししかお話ししていないんですけど、2 週間半ぐらい出張ベースで行ったので、ラオスの教育を大々的に支援したというものではないんですけど、私はラオスの防災教育のプロジェクトの短期支援をしにいきました。ラオスは自然災害国でもあって、防災教育もすごく盛なんなんですけれども、講演でも述べましたが、もともとの原因は、防災ソングを作ったけれどもそれが子どもになじんでいないと。それは、実は国際支援でよくあることなんですね。いろいろしたけど、実際教師や子どもたちがそれを使っていない、使ったとしても学びにつながっていない、等そういう問題があるというので、私がその間に入り、歌と子どもたちが好きな踊りという活動を組み合わせ、動きの一つ一つも子どもたちが作った振り付けということで、自分たちの好きな動きを歌に合わせてやったから、それはすぐ覚えていましたね。何年も経った後の今でも子どもたちが踊っているかどうか私は分からないんですけど、そういうことをラオスでしていました。それもやっぱり、セーブ・ザ・チルドレンという、国際 NGO という巨大なネットワークがあったからこそ、地

域会議というものがあり、プレゼン大会で優勝して呼ばれたというもあるので、そういう意味でも、どの組織でどんなことをしたいかというのは、色んなことにつながるのかなというのは思いますね。

山本 シャオさんからのフォローアップメッセージですが、地下鉄のそばのカフェから聞いているので直接お話しできずにすみませんということです。

白山 先生、もう一つ、学生のために聞きたい質問があります。白山です。すみません、たびたび。

本当に、36 カ国、国際教育の分野で、先生のご専門を生かしたミッションをもって働き続けてこられているわけですよね。それぞれの国で、ゼロから、人間関係も含めて全部作って仕事をしていくと。なおかつ、それぞれの国のミッションがあつて、達成しなくちゃいけないという課題があるかと思います。今、われわれも KPI だとかいろいろなことを言われていて、岡本先生のお仕事がどうかたちで目標設定されているのか分からないんですが、例えば 3 年とか 5 年の間にその目標を達成するために働く姿勢ということについてお伺いしたいのですが。つまり、常に毎日 120%、200%の緊張感や気合、情熱で過ごしているのか、あるいは長期的な自分の仕事の段取りも考えて 70%とか 60%で、緩めながらやっているのか。実際、柔軟にやっていらっしゃると思うんですけど、疲れ切ってしまわないのかという疑問です。

つまり、先生のお仕事は答えもないし、もしかすると分かりやすいゴールもないのではないかと。ですから、そういう結構見えないというか、非常に自分で見通しを立てにくい仕事を続けて行く中で、真面目な人なんかは、すぐつぶれちゃうと思うんですよね。ということで、実際に UNICEF や国連で働きたい人が、長く、本当にやりがいを持って仕事をしていくためのメンタルの整え方というか、そういうものがもしありましたら教えてください。

岡本 ありがとうございます。また後日個人的にゆっくりとお話ししたいぐらいの話になると思いますが、結論から申しますと、疲れますね、すごく。でも支えてくれる何かがあるからまだ続けられるというところでしょうか。私は、性格的にも 200%でいくタイプなので特に。基本的には、仕事は頼まれたこと以上のことをやろうとするので、常に上を見ながら走り続けるという感じでやっているんですけども、上を見すぎて首が疲れる、オーディエンスがそれに対応してくれない、同じビジョンを持っていない、等とギャップがあることもあります。

具体的な話を申し上げますと、今、北太平洋の小さな 3 カ国の担当をしています、コロナ禍のため日本からテレ

ワークです。そういう小さな国って、村みたいな感じなので、人と人とのつながりがすごく大切で、いきなりこんなにモートで、日本から Zoom など遠隔で繋がりたいというのは……どこかしっくり来ないというか、会ったこともない人と信頼関係を作るのは大変なんですよね。これをしなきゃいけないからこれを一緒にしましょうと、私はオーディエンスの立場になって極力サポートするようにしますが、それでも向こうの考えていることがわからない、返事が全くないか、自分がやると言ってくれたことをやらないとか、よくあるんですね。

それでも 200%でやり続ける・言い続けると、向こうにプレッシャーを与え続けるので、そこはあえて自分を抑えて、あえてリマインドをちょっと抑えて、1 週間待ってみるとか、2 週間待ってみるとか。そういうことをしないと、人間関係も空回りして仕事もやりにくくなるし、自分もつぶれると思うんですね。

すごく疲れるときもあるんですけど、先ほどちょっとお話しさせていただいた、何かのタイミングで感動する瞬間というのがあるから、そういうのが自分を支えてくれているんだろうなというのがよくあるんですね。

あと、対策として気をつけているのが、最後のスライドでお見せした 3E、よく食べて、よく運動して、Energize するというのがないと、多分、壊れてしまうんだろうなと思うんですよね。後は 5W1H。日々の業務に追われて、自分は何をしたかったんだろうと思うことがよくあるんですけど、定期的に自分に問い掛けて、日記を付けたりだとか、昨日こんなことがあったけど、いや、自分はこんなことがしたかったんだというのを自分に問い掛けてやっているという感じですかね。今でも、本当に試行錯誤でやっていて、答えなんてないんですけども。

白山 なるほど。本当にありがとうございます。でも、先生のお話を聞いていると、本当に、つらいというか、大変だとか、疲れるというその言葉の裏に、好きなことを楽しんでバランスを取りながら仕事をされているというようなことが、今、ちょっと、話の内容から分かりました。自分が突っ走るというよりも、相手がいて、その相手との距離感を見ながら、仕事も調整して、また時が来て状況が整ったらば一つとエネルギーを注入してやっていくというような、そういう仕事の仕方が少しイメージとして見えてきたような気がしました。やっぱり好きだというのが結構大きな原動力になっているような感じがいたしました。ありがとうございます。

岡本 ありがとうございます。

山本 それでは、お時間もだいぶ過ぎてしまいましたので、誠に残念ですがけれども、このあたりで一度質問を打ち切らせ

ていただきたいと思います。

岡本先生、本日はご多忙の中、わざわざご講演いただきまして、また素晴らしいお話をたくさん聞かせていただきまして、ありがとうございます。なかなか会場の熱気が伝わらないのがZoom講演会の難点でございますが、聴講者を代表して盛大な拍手をお礼に代えさせていただきたいと思います。

今回の講演に関しまして、ぜひ聴講者の皆さまの感想、ご意見を聞かせていただきたいと思います。今、皆さまのチャットボックスのほうに簡単なアンケートのリンクを貼り付けさせていただきました。ぜひ一言こちらのほうにフィードバックを頂ければと思います。皆様のフィードバックは岡本先生の方に、私どもからお渡しいたしますので、質問、コメント、何でも頂ければと思います。

なお、学内限定になりますが、本講演会は、manabaにて無料動画配信の予定もしております。今回の講演をもう一度聴きたい、あるいは、今回ライブで聴講できなかったお知り合いの方など、ぜひご利用いただければと思います。オンデマンドの配信の詳細は、中央アジア・日本人材育成プロジェクトホームページで後日ご案内いたしますので、そちらのほうをご参照ください。

それでは、岡本啓史先生をお招きした本日のご講演、これにて終了させていただきます。間もなくこちらのほうでミーティングルームを閉めさせていただきますが、どうぞご順次にご退室くださいませ。皆さま、本日はご参加ありがとうございました。

白山 ありがとうございました。

第15回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会

4大陸・6勤務国・36カ国への 国際教育支援を通して得た学び



講師
UNICEF North Pacific
Education Specialist
岡本 啓史 氏

日 時：11月20日(金) 17:25~18:45

会 場：Zoom Meeting

対 象：本学学生・教職員，一般

参加登録〆切：11/20(金) 17:00

申込フォームにて参加登録をしていただくと、どなたでも無料でご参加いただけます。ご登録後、講演会入室のための URL をお送りいたします。

申込フォーム



※当日ライブ視聴できない本学学生・教職員の皆様のために、manaba にて無料の動画配信を予定しております。詳細は、講演会后、下記 NipCA プロジェクト Website にてお知らせいたします。

主 催：筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

協 力：筑波大学 グローバル・コモンズ機構，国際室，
グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会，スーパーグローバル大学事業推進室，
地域研究イノベーション学位プログラム，人文・文化学群，社会・国際学群

問 合 せ：NipCA プロジェクト担当事務室 Website: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>
TEL: 029-853-4251 / Email: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」主催
公開講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」
第15回 4大陸・6勤務国・36カ国への国際教育支援を通して得た学び
UNICEF Education Specialist 岡本 啓史

2020年12月15日

監 修 臼山 利信
編集・校正 梶山 祐治 (主担当)、山本 祐規子、谷越 祥子、笹山 啓
発 行 者 臼山 利信
発 行 所 筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」
茨城県つくば市天王台 1-1-1
Tel: 029-853-4251
E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>
印刷・製本 株式会社アイネクスト



筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Tel. 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>

15 陸の豊かさも
守ろう



公開講演会シリーズ第15回のテーマカラーは、国連が定めた17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」のうち、「目標15. 陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る」のアイコンの色を基調としています。